認定特定非営利活動法人 日本雲南聯誼協会
【東京本部】〒162-0846 東京都新宿区市谷左内町 21-13 1 階
Tel：03-5206-5260　Fax：03-5206-5261
Email：yunnan@jyfa.org　URL：https://jyfa.org/
【雲南支部】中国雲南省昆明市人民東路 289 号集大広場 2011 室
Tel.+86-871-63311468　Fax.+86-871-63320658
http://www.facebook.com/NPO.JYFA　@jyfa
ブログ 雲南の郵便屋さん 検索
編集・発行人　初鹿野 惠蘭
印刷協力　昭和情報プロセス㈱　㈱技術評論社／デザイン Hope Company

Japan Yunnan Friendship Association
彩雲の南
第72号
発行日　2020 年（令和 2 年）8 月 15 日
会報

認定 NPO 法人
日本雲南聯誼協会設立 20 周年
これからの 20 年に向けて

設立大会(2000年6月24日 東京・八王子市)

▲協会の前身,緑葉基金会で初めて支援した麗江鳴音郷小学校(1996年3月7日)

月日の流れは早いもので、「認定NPO法人日本雲南聯誼協会」は設立20周年を迎えました。振り返ると、ゴールの見えない長く困難な道を、日雲の子どもたちのためにマラソン選手のようにひたすら走り続けてまいりました。時には厳しい状況に陥ることもありましたが、皆様の深く温かいご理解に支えられ、茨の道を乗り越えることができました。特に協会顧問の片岡巌様には、経営される「株式会社技術評論社」の一室を2003年から無償で提供していただいており、おかげで協会は心ゆくまで活動できております。ここであらためて厚くお礼申し上げます。

新たな時代を担うのはいつも「若者」です。子どもたちの健全な成長は協会にとっての大きな喜びであり、その成長の土台として「教育」は欠かすことのできないものです。教育は知識だけでなく、「思想」「夢」「志」をもたらします。それらを手にした子どもたちの可能性は無限大で、予想できないほどの成長を遂げ、社会に貢献できるようになります。

しかし、雲南省の山奥で暮らす少数民族の少女たちに対する「教育」への理解は、社会的にまだまだ低いのが現状です。彼女たちはいずれ母親となる、社会にとってなくてはならない存在です。彼女たちが教育を受けられれば安定した社会に繋がるはずと、私たちは2006年に「25の小さな夢基金」プロジェクトを立ち上げ、昆明の高校に入学した少女たちが社会に羽ばたくのを手助けしてきました。

私と協会が抱く夢は、さらに20年先に向かって子どもたちが平等に教育を受けられる環境を整えることです。平和な社会で子どもたちの輝く笑顔がいつも安心して見られれば、どんなに素晴らしいことでしょう。一人ひとりの人生が豊かな社会を創るために、年齢や国籍に関係なく力を合わせて進んでいきましょう。

光阴荏苒，岁月如梭。今天，日本云南联谊会已经走过了一路艰辛历程的20年。值此纪念之日，首先要向多年来支持和帮助我们的各界朋友，致以衷心的感谢和诚挚的敬意！

1996年，自从云南丽江地震救援归来，协会2000年正式注册成立。20年来从无到有、从小到大，汇聚了中日两国众多仁人志士的心血和情怀。我们不忘初心、不辱使命，为帮助交通不便、生活困难、地处偏远大山里的民族儿童能接受更好的教育，协会深入地震灾区和贫困乡村，捐资助学、扶危济困，先后在云南启动了“50所小学”校舍建设工程；积极搭建了“春蕾班”平台，协会创办“25个小梦想基金”，帮助边疆女学生圆梦新的人生；在JICA日本国际协力机构的协助下，协会帮助学校教职员工和孩子们培养健康卫生和安全知识；协会多次组织“云南交流之旅”、“云南秘境之旅”，参展ONE WORLD FESTIVAL，助力云南优秀的民族文化走进日本和云南家乡与异域日本的民间往来。

20多年的付出，我们收获了一生。感谢云南各级政府的关怀；感谢日本爱心人士的深情厚意；感谢各民间团体、机构的深厚友谊。我们看着帮扶的少数民族孩子们的茁壮成长，也感受了更多好人的爱心传递，已成为我们今天不懈坚持的原动力。

协会在成立20周年之际，正式在云南昆明注册代表处，以此作为我们促进云南与世界间的经济、文化交流工作的新起点。让我们在社会各界朋友的关爱和支持下，携手共建“人类命运共同体”更美好的明天。

認定 NPO 法人日本雲南聯誼協会 理事長　初鹿野惠蘭

数字で見る協会 20 年の歴史
20 years of progress in numbers.
Since2000

※2020 年8月 10 日現在の数字
全て延べ数です

25の小学校プロジェクト
25校
25 の少数民族地域で小学校を建設
約 27,000 人
の子供が小学校で学ぶ
2000 年～ 2020 年

25の小さな夢基金プロジェクト
10名
少数民族地域の女子の進学を支援
980人
の女子が高等教育を受けることができた
320 人
のサポーターが彼女たちを支えてきました
2006 年～ 2020 年

未来人材育成プロジェクト
約 1,120 人
の日雲の大学生が人材育成プログラムに参加しました
2010 年～ 2020 年

約 6,800 人
協会活動を支えていただいたボランティアの人数

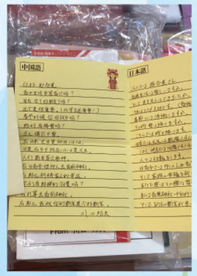
正会員 899 名
賛助会員 96 名
法人会員 101 団体
20 年間に支援していただいた皆様へ心より感謝申し上げます

「25の小さな夢基金」

社会に役立つ人材育成を目指して「里親が育む貧困地域の女子の夢」

■16歳の少女の願い

雲南省の少数民族地域の少女たちのほとんどは16歳になると家を支えるために働きにでるか、結婚をするかの選択に直面します。しかしもっと勉強をして故郷に役立ちたいという強い意志をもつ女子は沢山います。雲南省ではそんな女子のために「春蕾計画」という支援事業が行われています。協会が行っている「25の小さな夢基金」はその中から選ばれた生徒を援助するプロジェクトです。



■将来を切り開く貧困女子のために

協会の夢基金の支援生徒は昆明市にある全寮制の学校で3年間高校生活を送ります。その生活の殆どは勉強に割り当てられ毎日12時間以上の厳しい授業と自首勉強に充てられています。もちろんアルバイトもできず日夜生活の全てが大学進学に向けて、故郷のためにと頑張っています。

■彼女たちを支える里親の真心

彼女たちの生活に不可欠なのは「25の小さな夢基金」に賛同する里親の皆様の支えなのです。支援金はもちろんですが何よりも

▲厳しい3年間の寮生活を終えて大学進学が決まり晴れやかな表情で迎える卒業式

大切なのは皆様からの励ましの手紙と心のプレゼントが彼女たちの3年間を乗り切るを心の支えとなっています。その真心の支えを受けて約1,000名の夢基金生のうち卒業後は大多数が大学に進学することができました。大学卒業後は故郷で教師、検察官、裁判官など地域の発展に欠かせない人材として活躍しています。今後は日本への留学など、さらに支援を広げる計画です。

■里親サポーター募集中!詳しくはホームページまで

JYFA　検索　https://jyfa.org

皆様に支えられて20年
関係者一同心より感謝申し上げます

協会現地活動を支えていただいている団体の方々へも感謝申し上げます

中華人民共和国駐日本国大使館・領事部、雲南省政府、昆明市、雲南省各市・自治体
省市自治体教育委員会、雲南省婦女連合会、昆明女子中学、在重慶日本国総領事館

「50の小学校」プロジェクト

貧困から脱却への一歩　少数民族の子どもたちへ学びの場を

■貧困から生まれる教育の放棄

雲南省の少数民族の子どもたちに学びの機会を提供するため、協会は2001年に「50の小学校プロジェクト」を始めました。これまでに開校した小学校は25校になり、雲南省の教育環境の改善にも取り組んでいます。

雲南省の少数民族の多くは、山岳地帯などの厳しい自然環境の中で暮らしており、自給自足の生活を送る地域は少なくありません。また家が貧しいことや地震の多発による危険な校舎に不安を覚える親御さんも多く、このような理由で、義務教育を途中で放棄する子供が未だに少なくありません。

▼世帯年収が10万円にも満たない少数民族の家庭は未だ多い

■教育の第一歩を支える会員の皆様

このような子どもたちの学習環境を整え、地域の教育向上を支えていただいたのは会員やボランティアの皆様の人としての思いやりと行動が25校も小学校を建てることができました。
これからも皆様のその大切な気持ち雲南で形にして行くことで、子供たちが笑顔で学ぶ喜びと地域のより良い生活の向上を目指し務めてまいります。

▼25の少数民族地域に50校の小学校を支援する目標で
これまでに25校が開校しました

文化交流

楽しみながら学ぶ雲南少数民族文化

■文化交流から始まる新しい関係

雲南の少数民族と日本は、歴史と自然を背景に共通する豊かな文化を持っています。協会は教育支援事業と同時に多面的な交流事業とイベント進めています。少数民族文化の日本への紹介を初め、少数民族舞踊の日本公演、出張授業、イベント出展、独自の少数民族写真展などを行っています。また、雲南と日本企業を結ぶ経済交流会など、雲南と日本をつなぐ窓口として行っており、ボランティアの皆様と共に積極的に行ってきました。今後も新しい企画やイベントを行って行きますので是非ボランティアの参加及び出張授業や講演の依頼をお待ちしています。

▼日雲経済交流会を毎年開催

▼「江戸川人生大学」にて講義

▼七彩雲南・雲南民族舞踊と雲南省少数民族文化展を東京・名古屋にて開催

アジア未来への人材育成プロジェクト

雲南省と日本の若者を支援～未来への道を創造する～

◀雲南大学生フォーラム特別講演・高橋秀行氏
（ステートストリート信託銀行・会長）

■もっと世界とつながりたい

雲南には日本語を学ぶ大学生をはじめ「25の小さな夢基金」から大学へ進学した生徒や海外に興味のある大学生がたくさんいます。"生きた日本語を勉強したい""将来、日本に関わる仕事がしたい""日本の同世代と交流したい"という熱意にこたえるために、協会は「アジア未来への人材プロジェクト」を立ち上げました。

このプロジェクトは日本に親近感を抱く若者たちが新たな「日中のかけ橋」になるためのバックアップをするのが目的で現地大学、日本の大学そして省政府や自治体と連携して積極的に行われています。これまでに日本人学生と共に学ぶグローバル学習プログラムや日本の著名なスピーカーが講演する大学生フォーラムなど、様々な取り組みを定期的に行っています。

■皆様の参加が若者を育てる

豊かな国際感覚を持ち、次世代を支える人材を育てるこれら取り組みの際に必要なことは、参加していただける講師やボランティアの皆様のご協力が不可欠です。これまでに数々のプログラムを行い様々な業界の方々の参加とご協力により、大変に内容が充実し、好評を博しています。この取り組みに参加した大学生は社会人へと成長した後に日本と雲南の相互で活躍する人材は少なくありません。協会は今後も積極的に皆様と共にこの社会貢献プログラムを推進してまいります。是非皆様の応援とご協力をお待ちしています。

25の小さな夢基金

第8回日雲高校生国際交流プログラム In 昆明女子中学 ＋ ホームステイ

今回で第8回目となる上海日本人学校高等部との交流会が昨年12月27日、昆明市女子中学にて開催されました。春蕾生の子供たちや校長先生は今回の交流会を一段と心待ちにしており、全て昆明市女子中学で企画を考案。今までよりもさらに内容が豊富になり、雲南の文化についてより身近になって知ることができる機会となりました。

特に雲南で深く歴史を持つお茶、「三道茶」を春蕾生が自らおもてなし。上海日本人学校の生徒に大好評でした。「三道茶」はペー族（白族）の人々が、お祝い事をするときや、お客さんをもてなす時に淹れる特別なお茶。中国語で"一苦二甜三回味"（苦味、甘み、後味を楽しむ）と言われ、これを人生で経験する「3つの境地」として例えられています。三道茶についての歴史を聞き、上海日本人学校の生徒は、「中国人の考え、昔ながらの感覚がお茶を通して今でも伝わっていることに感動しました。」と歴史を感じながら、お茶を口に運んでいました。

各教室をイベントブースにして、色々な文化を楽しめる各民族の伝統刺繍紹介や、民族衣装の体験コーナー、書道ブースなど盛りだくさんの企画を今回のために春蕾生が用意しました。

伝統刺繍ブースでは春蕾生が小さい頃からおばあちゃんやお母さんに教えてもらったやり方を上海日本人学校の生徒に教え、糸を選んだりデザインを考えたりと交流を図っている様子が見受けられました。民族衣装の体験コーナーでは春蕾生が自前の衣装を持ってきて、着せ方を教えるなど、とっても楽しそうな様子でした。
そして書道ブースでは、それぞれの思いを一枚の紙に書きました。「中国♡日本」「ありがとう」など素敵な文字たちで溢れていました。お互いの言語を話すことはできなくても、文字で交流を図るのは日中ならではのコミュニケーション方法ですね。
少しずつ打ち解けてきたみんな。昼食は、食堂で日雲の学生たちが机を囲んで、ボランティア大学生の通訳を通じて交流を図りました。笑いが絶えず楽しく食事をし、さらに仲を深めました。

たくさん交流をして仲良くなったのにも関わらずあっという間にお別れの時。最後に"Let it go"をみんなで大合唱。中国と日本語の歌声が教室に響き渡りました。生徒たちはこの出会いに、泣きながら抱き合い、別れを惜しみました。

心に残る感動のホームステイ

春蕾生と交流を深めた後、上海日本人学校の生徒たちにとってイベントはまだ終わりません。雲南省の各家庭にホームステイもしました。7家族が受け入れてくださり、あるホームステイ先では新年会のように親族が集まって迎え入れるなど子どもたちを大歓迎。温かい料理を振る舞い、お互いの言語を喋れなくても紙とペンで交流を図るなど心温まる時間を過ごすことができました。実際に中国人の家庭で生活することで文化や、マナーなどを吸収できる場になったのではないでしょうか。

今回の交流を通じて、未来を担う若者にとって大切な交流の機会を設けることで、真の心と心のつながりを感じ、深くお互いの文化を理解するきっかけとなりました。

私たち協会一同も若者同士の異文化理解、交流会をさらに学生たちの身になるためのものになるよう邁進していきます。

最後に大学生の現地ボランティアスタッフやホームステイ協力者の皆さん、日本から駆けつけていただいた佐伯監事、色々な方に支えられ今回のプロジェクトも成功することができました。ありがとうございました。

感謝！

新型コロナウィルス緊急支援　国境を越え想いを伝えるマスク

▲雲南から「一衣帯水 与子同報」のメッセージと共に届いたマスク

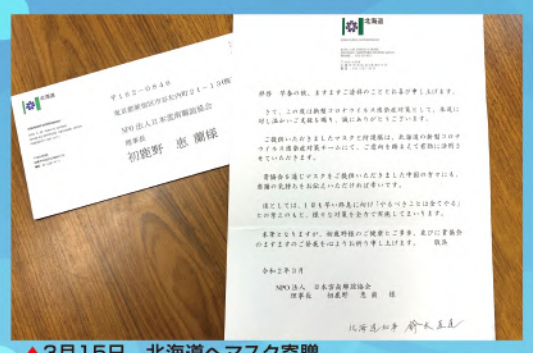
▲4月14日　当協会の北原茂実理事が理事長を務める「医療法人北原国際病院（東京都八王子市）」へ初鹿野理事長が訪問しマスクを寄贈

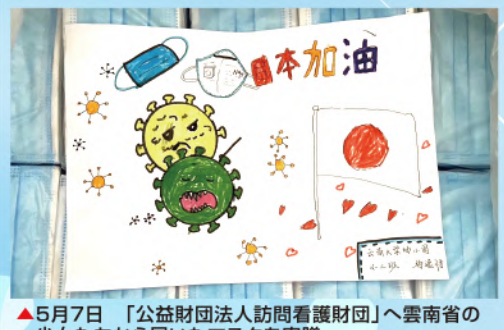
▲5月13日　公益社団法人「東京都医師会」へ寄贈

▲4月7日　「千代田区立和泉小学校」を初鹿野理事長らが訪問し、マスクを寄贈

新型コロナウィルス感染拡大によって日本でもマスク不足が深刻となりました。これまでに協会を通じて行われた「雲南省へのマスク支援」で日本から届いたマスクに感激した、雲南省の皆さんより今度はお返しにと、雲南省は下より蘇州や香港などの中国企業から、約 4 万枚のマスクをはじめ体温計や防護服が協会に届きました。届いたマスクは、自治体、医師会や病院を中心に深刻なマスク不足に悩んでいた方々にお届けしました。マスクの箱にはメッセージが書かれており同じ苦境に立つ人間として国境を越えた人と人との繋がりと友情を強く感じました。特に協会の夢基金卒業生から寄せられたマスクの寄付については支援した里親サポーターを心配するメッセージにあふれる感動の物語にとなっています。詳細は次号会報にてお伝え致しますのでお楽しみに。

40,000 枚のマスクを届けました


▲3月15日　北海道へマスク寄贈
北海道庁よりお礼状が届きました



▲5月7日　「公益財団法人訪問看護財団」へ雲南省の少女たちから届いたマスクを寄贈

▲4月23日「医療法人財団 健貢会 東京クリニック（千代田区）」を初鹿野理事長、初鹿野仁さん（会員）が訪問し、マスクを寄贈

▲4月28日　「埼玉県庁」を初鹿野恵蘭理事長、佐伯義博監事、寺内明子大宮支部長、初鹿野仁さん（会員）が訪問し、マスクを寄贈

▲4月「25の小さな夢基金」卒業生からの寄贈されたマスクをサポーター、会員、協力者の皆様などへ発送しました

マスク寄付者（順不同、敬称略）：兪　菊、熊　寛、張　嶸、伍　碧雁、李　天祥、楊　智捷、鹿　娜、蘇州弘化社慈善基金、江蘇省無錫江陰市華士鎮華西村愛心人士 馬海維、雲南明靖律師事務所 周文曙、雲南永青商貿公司 餘燕青、雲南海外聯誼会 / 雲南省新的社会階層人士“同心抗疫”服務団、雲南省僑商会 昆明市海外聯誼会、昆明市女子中学春蕾班卒業生、アジア通信社　徐静波、雲南躍洋労務派遣服務有限公司、雲南省帰国華僑連合会、許　雲霞、李　小一

25の小さな夢基金

サポーターのお手紙と贈り物を届けました!

昨年 12 月 27 日サポーターの皆さんから預かった 64 通の手紙と春節の贈り物を、理事長、佐伯義博監事と雲南支部スタッフが春蕾生たちに届けました。生徒達にとって待ちに待った心のこもった手紙に春蕾生の顔もほころんでいました。

■思いやりの手紙から生まれる絆

生徒にとって里親サポーターとの手紙の交流は、人生相談でもあり故郷を離れ違う環境で頑張る彼女たちにとって学校以外で唯一相談できる機会なのです。彼女たちにとって一生の宝となる心の手紙なのです。支援している方は是非一度お手紙を書いて下さるようお願い致します。

お知らせ

イベント中止のお知らせ

2020 年内の協会主催イベント、及び他団体イベントへの参加は新型コロナウィルス感染症拡大防止上の観点から下記のイベントは中止又は延期とさせていただきます。ボランティア並びに関係者の皆様へ大変残念ですが、どうぞご理解いただきますようお願い申し上げます。

■10 月 31 日　チャリティーゴルフコンペ

■グローバルフェスタ JAPAN（開催中止）

■12月19日　協会設立 20 周年記念式典（延　期）

■同日　チャリティー忘年会

日本雲南聯誼協会東京本部事務局
TEL.03-5206-5260（平日10～17時）
yunnan@jyfa.org

お知らせ

協会ホームページが新しく生まれ変わりました

設立 20 周年を記念し、協会公式ホームページ（HP）をリニューアルしました。

皆さまと協会をつなぐプラットフォームとして、必要な最新の情報をわかりやすくお届けします。見やすく、使いやすく、親しみやすいＨＰを目指し、新たな内容も追加しました。会員のご入会やお問合せもこちらから簡単にできますので、是非のぞいてみてください！

公式 HP　https://jyfa.org/

日本雲南聯誼協会　検索

編集後記

日本語教師の資格を取ろうと学校に通い始めて、日本語の繊細さに驚かされます。例えば理由を表す「から」と「ので」は微妙に違っていて、前後のつながりが弱い「から」は言い訳には使わない方がいい、とか。日本人は無意識に使い分けられますが、これを勉強して身につけるとなると大変な努力が必要です。ましてや日本人の少ない昆明で勉強することを思うと、協会活動に関わってくれている現地の日本語学科の大学生たちには頭が下がります。

木本　一彰